



ポルティコの広場

大学の完成年度を迎えて

新潟県立看護大学学長 中島紀恵子



入学生宣誓

2002年4月に開学した本学は、今年度の新入生87人と第1回の3年次編入生8人の入学により、創設時より予定していた在校生の全員がそろいました。学生、教員ともフルメンバーがそろい、400人近い若者が暮らすわが大学の学び舎は、朝早くから夜遅くまで生命力にあふれていることを感じるこの頃です。

4年生は、現在、訪問看護ステーションや市町村での地域看護学実習に取り組み、それと並行して卒業研究を進め、一方で自身の進路・就職を模索しているところです。初めての卒業生を送り出す完成年度の翌2006年度には、大学院研究科看護学修士課程を開設する予定です。大学院が設置されますと、今年度卒業予定の第1期生は、就職のほか、進学という進路もより現実的な選択肢として手に入れることとなります。

現在、全国には120を超える看護系大学がありますが、半数以上は本学と同じか、それ以上に歴史の浅い大学です。どの大学も、卒

業生や在校生に、より質の高い教育・研究の場を用意したいという強い願いから、大学院の設置に取り組んでおり、すでに大学院修士課程をもっている大学は看護系大学の7割以上になりました。

いま看護は、看護ケア利用者の安心に加え、健康づくりから安全管理に関連する全ての部門での生活や医療の質に深くかわり、その保証を左右するのは、看護人材の質にかかっているといっても過言ではありません。というのも保健医療福祉、中でも医療関係者のうちの7~8割は看護職です。その仕事は、臓器移植コーディネーターに象徴されるように、高度な臨床判断力やマネジメント力が、様々な場面で要求されています。

本学大学院は、自己の能力のいっそうの向上を望んでおられる現場の看護職のみならずにも大学院で学ぶ機会を積極的に提供いたします。そのためにも、学部における基礎教育をいっそう充実させなければならぬと考えております。



緊張の面持ちの新入学生

- も 1ページ 大学の完成年度を迎えて……中島紀恵子
- 2ページ 新入生・在校生のメッセージ／新教職員の横顔
- 3ページ 海外研修報告／教育組織の紹介
- 4ページ 3年次領域別臨地実習報告／教育活動
- 5ページ 看護研究交流センター
- 6ページ トピックス
- 7ページ サークル紹介（映画サークル）
- 8ページ 入試関連情報



新入生・在校生のメッセージ

1年生を迎えて

第2学年（自治会長） 清水祐一

新潟県立看護大学に入学して

第1学年 田中恵美

受験勉強の甲斐もあって、今年、新潟県立看護大学に入学できました。希望していた進路に進むことができ、とても幸せに思います。不安と緊張でいっぱいだった私ですが、新潟県立看護大生となった今は、毎日がとても充実しています。

高校までとは違い、専門的な授業が多く、覚えることはたくさんありますが、先生方の授業は分かりやすく、とても興味がわいてきます。サークルを通じて先輩方とも知り合うことができ、また、たくさんの友人たちにも恵まれて、楽しく有意義な毎日を過ごしています。

大学生になって、自由には責任が伴うのだという事がわかってきたようにも思います。勉強の面でも、人としての向上の面でも、自分の目標に向かって、この先4年間を悔いが残らぬように精一杯がんばっていかようと思います。



2005年春、新潟県立看護大学は新入生を迎えたことで1学年から4学年まで全ての学年が初めて揃いました。入学式に参加させていただいた私は、式でとても凛々しい1年生の姿に今後の4学年揃った新しい学校生活への期待が膨らみました。

入学から数ヶ月たった今、学外オリエンテーションや球技大会、各サークル活動などにおいて、1年生同士の間もかなり打ち解けてきたことと思います。学年を超えた交流も今後さらに多くなっていきます。特に大学祭は、学年間の交流はもちろん、地域の皆さんと交流することができる場でもあります。看護大学にしかできない、楽しい大学祭をみんなで作り上げましょう。何かわからないことがあれば、なんでも先輩に聞いてみてください。

大学生活を楽しむには、サークル活動や学校行事への参加だけでなく、学業やアルバイト等のバランスを保つことが重要です。何かひとつに偏りすぎないように視野を広く持つことでより一層充実した学校生活を送れることと思います。今、この時間、この場所での学校生活が、将来振り返ったときに誇れるものとなるように内容の濃いものにしていきましょう。

保健師・助産師・看護師と、目標はそれぞれですが、それぞれの夢に向かって共に頑張っていきましょう。



3年次編入生からの発信

3年次編入生のみなさんからは、個々のメッセージが寄せられました（広報）

- ・対象者やそのご家庭の持つ様々な問題に目を向けられるよう、広い視野で学んでいきたいです。（相田恵）
- ・看護に対する視野を広げ、対象者の望む看護を提供できるよう学んでいきたいです。（小田倫子）
- ・看護学をより深く学問として学び、よい看護を実践して提供したいです。（小田辺真紀）
- ・社会人向きのカリキュラムがないので、空き時間を利用して将来を模索します。（小島美里）
- ・この学校でより知識を深め、よい看護を提供できるように学びたいと思います。（三五祐子）
- ・より広い視点で対象者にケアをできる力を養えるよう頑張ります。（武田美穂）
- ・楽しく意欲的に大学生活を送り、魅力的な看護師になりたいです。（畠山良子）



3年次編入生のみなさん

新教職員の横顔

教員（敬称略）

名前	藤田 尚	高柳 智子	石岡 幸恵	浦山 留美	櫻井 信人	柴田 美央	長瀬 亜岐	村川 英伸
講座（領域）	看護基礎科学（文化人類学）	成人看護学（急性期）	成人看護学（急性期）	広域看護学（精神看護学）	広域看護学（精神看護学）	母子看護学（小児看護学）	広域看護学（老年看護学）	広域看護学（老年看護学）
出身地	青森県	新潟県見附市	上越市	富山県	福岡	岩手県	北海道	北海道
前職	新潟県立歴史博物館主任研究員	福井大学医学部看護学科（講師）	新潟県立中央病院（看護師）	北海道医療大学大学院看護学修士課程	京都大学医学部付属病院（看護師）	東京慈恵医大医科大学附属病院（看護師）	名古屋市立大学	長岡看護福祉専門学校（専任教員）
趣味	「食」「飲」「眠」（あ～しあわせ）	ウォーキング、散策	ダイビング、ダンス	旅行、ヨガ	旅行	散歩、ラーメン食べ歩き	外傷セミナーへの参加	ガーデニング、ドライブ
研究テーマ、あるいは関心のある領域	人類学の中でも古病理学とか古疫学とかいった百の人の骨や歯に残った病気の痕跡を研究対象とし、そこから栄養、寿命、食性、疾病構造などを考察します。	脳血管障害患者のリハビリテーション看護、高齢者のスキンケア	急性期疾患を持つ患者の看護	精神科看護における身体的アプローチについて	精神科におけるリスクアセスメント、forensic nursing、法医学	医療ケアを必要とする子供の看護・小児看護師の実践するケア内容	高齢脳卒中患者の看護	認知症患者のBPSDと薬物療法に関する研究
抱負、モットー	「勇気」が右の路です。人間の能力にそう大差はないと思います。新しいことをはじめるときは難し不安ですが、「一歩」を踏み出す勇気を持てば、自分を高めたいと思います。	10年ぶりに新潟に戻ってきました。まだわからないことだらけですが、学生の皆さんと共に成長していきたいと思っています。	興味のあることを深め、学び、成長していきたいと思っています。よろしくお願ひします。	何事も積極的に行っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。	いろんなことに挑戦し頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。	学生の皆さんと共に学び、考え、教員として成長できるようにがんばりたいと思います。よろしくお願ひします。	1年にひとつ目標を達成するです。今年の目標はBLS&AEDの普及活動です。よろしくお願ひします。	守（修）破離の精神でやっていきたいと思っています。

■事務局・図書館 (敬称略)

名前	益田 英一	村松 良雄	前田 敏夫	仲村 健吾	草間 慎一	渡邊 暁子	吉原 貴子	加藤 由紀	宮崎 泰子
現職	事務局次長	教務学生課長	図書学生係長	庶務係	庶務係	図書学生係	図書館・司書	図書館・非常勤職員	学長秘書・嘱託員
出身地	上越市板倉区	上越市	上越市	上越市	上越市	上越市	糸魚川市	妙高市	上越市三和区
前職	新潟県立にしき園次長	上越地域振興局健康福祉環境部安塚地区センター地域福祉課長	上越地域振興局健康福祉環境部	安塚地区振興事務所	農業総務課	直江津工業高等学校	県立図書館	民間企業(事務職)	会社員
趣味	囲碁、マージャン	特にありません。家で酒を飲みながらDVDを見てるのがよいです。	サイクリング、自然観察、ハンターカブを所有	スキー(といっても年に5~6回行ければいい方)	温泉		映画鑑賞	スポーツ観戦	映画鑑賞、散歩(上杉謙信と河井継之介の大ファンで、2人のゆかりの地をこれからゆっくり歩く時間がもてたらと思っています。)
抱負、モットーなど	明るく楽しい職場作り	3年前まで看護短大の教務係長として3年半お世話になりました。看護大学の完成年次を迎え一杯努力したいと思っています。	良いと思ったことは、人目を気にせずやってみよう。		平常心	早く仕事に慣れ、頼りになる事務になりたいと思います。どうかがんばっていきましょう。	司書1人では手が足りないことも多いですが、なんとかかかっています。	夢に向かって勉強されている学生の皆さんはともかく見えます。私も常に前向きな気持ちでがんばります。	教育機関で働いた経験が今までなかったもので、ここで得られる経験はともかく貴重なものになると考えています。

英国ウェールズにて

実践基礎看護学 助教授 堀 良子

私たち日本人は英国のことをイギリスと呼んでいます。また私たちは英国をEnglandと表現し、英国人をEnglishと言います。何の疑問も感じません。だって英語の本にはそう書いてあるしその教室で習ったからです。イギリスっていったいこの国の言葉でしょう。それらが本当は間違っていたり、歴史的な日本独自の外来語と知ったのが、私が英国に行ってます最初に発見し驚いたことです。今年冬、私はウェールズ大学スオンジー校を中心に病院、保健センターその他で感染看護と看護技術教育を中心に研修を受けてきました。そのことで学んだことはたくさんありますが、ここではこの国のことについて書きたいと思います。

初め私は、ウェールズのある町でホームステイをしながら研修を行っていました。ホストファミリーのロイは面倒見のとても良い人だったのですが、私がついに英国のことをEnglandと言ってしまおうと、必ずそれはBritainだと正しました。正確にはGreat Britainだと。とてもこだわっていました。でも後でロンドンに行った時には正確にはUK (United Kingdom) と教わりました。Great Britainと北アイルランドを合わせてUKなのです。そこで初めて“いったい今まで言っていたことは何だったんだろう”と思ったのです。“日本ではイギリスと言うんだよ”と言っても誰も理解してくれません。

イギリスはポルトガル語から来ていることがわかりました(広辞苑付きの辞書を持って行っていたのです)。英国はイングランドとウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国からなる立憲連合王国です。England-English, Wales-Walsh, Scotland-Scottish, Northern Ireland-Irishとそれぞれの国とその国の母国語があります。UK全体では英語が公用語ですが、ウェールズでは大学教育は英語で行われるものの、実習要項、シラバスや広報に関わるパンフレット等は必ず英語とウェールズ語

海外研修報告

の併記ですし、小中学校はウェールズ語で教育されるのが一般的です。ウェールズ語は全く英語と似ていません。大学の先生も、ウェールズ出身の先生は英語は外国語として勉強してきたので比較的苦手で、発音にWalshなまりがあってとても聞き取りにくいのです。また、英語は流暢だがウェールズ語は話せない人も多いのです。保健師さんなどは訪問先のお年寄りなどウェールズ語しか話せない人が多いため両方わからないと仕事ができないなどの問題もありました。ロンドンには人種のるつぼでしたが、地方に行けば行くほど白人の地元民の人たちでした。

皆さん自国にとっても愛着と誇りを持っていると感じました。丁度行っていた時にセントデービッド・デイといってウェールズの国家の祝日があって、子供たちは民族衣装を着て幼稚園や小学校に行きお祝いをします。大人たちは国花の黄色の水仙のプローチをみんな胸に付けて仕事し、あちこちでさまざまな行事が催されます。人々はその日を心から祝っているようでした。ですから、私のように無知な者が不用意にEnglandなどと言ったら気になるのです。ロンドンで感じたことですが、英国には博物館はもろろんのこと道路沿いや公園など至る所に戦争に関係する功労者の像があり、戦いの歴史とともに国家が形成され今のUKがあるのだと認識しました。皆さんご存知でしたか。日本にいただけでは考えられないことです。自分の無知を恥じると同時に海外には行ってみるものだとつくづく思った次第です。



西ウェールズ病院のインフェクションコントロールナースと

連載5 成人看護学講座 慢性期領域

成人看護学 慢性期領域は、成人期にある慢性的な健康障害をもつ人とその家族への看護について探究しています。

成人看護学は2年次に開講し、人間の健康と看護を基盤として、成人期の発達段階を踏まえて諸理論や保健の動向について教授します。さらに慢性的な健康障害をもつ人々へのアプローチ、つまり障害をもちながら生活の再構築を必要とする患者のリハビリテーション看護や慢性病をもちながらセルフケア行動の形成・維持を促す患者の看護、内科的治療を受けながら生活するがん患者の看護など、慢性期看護の骨子となる健康障害に焦点をあてて、一貫した授業・演習・実習を展開しています。4年次の専門ゼミナール・専門実習・看護研究では、関連文献のグループディスカッションや文献検討を通して、問題意識をテーマへと発展させ研究

教育組織の紹介

プロセスの学習と同時に看護の知を深めていきます。

研究活動としては、病院、地域・在宅などを含めた療養の場において、病をもちながら生活する人々の療養生活を支えるための連携のあり方や継続看護についての課題に取り組んでいます。



後列左から 直成講師、加藤教授、酒井講師
前列左から 飯田助手、榊澤助手、内藤助手

3年次領域別臨地実習報告

3年次臨地実習を終えて

第4学年 亀尾 美佳

3年次の臨地実習は、成人・母性・小児・老年・精神の各領域です。約半年間の実習は、情報収集にアセスメント、計画立案、実施、記録に追われながら、ものすごい速さで過ぎていきました。さらに冬季には19年ぶりの大雪に見舞われました。毎朝夕に雪かきし、時間は足りず、筋肉痛には悩まされ、大変な実習でした。しかし、患者さんと話している時は楽しく、知識や技術が身についていくうれしさもありました。

講義では、「へー」と受け身で聞いていることが多かったのですが、実習では受け身では、誰かが解説してくれることは

ありません。だから、自分から患者さんに関わり、調べ、看護技術を練習しました。そうすると、「へー」が「なるほど」になり、「どうだろうか」と疑問を持ち、興味がわいてきました。わから



さいがた病院にて（中央が筆者）

ないところや困っていることを看護師さんや先生、学生同士で相談したりしながら進めていくと、いつの間にか楽しいと感じられました。もちろん、何度かへこたれそうになりましたが、最後まで各領域の実習をやり通すことができよかったと思います。

実習を受け入れてくださった患者さん、ご指導くださったスタッフの方々、先生方、相談にのってくれた皆さんに心より感謝しています。

3年次領域別実習の成果と課題

前実習部会長 深澤 佳代子

昨年の9月からこの2月にかけて、本学開学以来、初めての3年次領域別実習が行われました。この実習は、2年次の基礎看護学実習Ⅱの「病院における看護活動を総合的に理解し、看護を実践する者としての基本的態度を養う。また、既知の知識および技術を基に、健康上の問題を持つ患者に日常生活援助を実践する能力を養う。」を受け、「治療あるいは療養施設、地域を実習の場とし様々なライフステージと健康レベルにある人の看護援助を通し、対象あるいは地域のニーズを把握する能力を身につける。また、個別性に応じた看護援助の方法を習得する」ことを目的としています。

実習期間中には新潟県中越大地震の発生、例年にない大雪や数名ですがインフルエンザへの罹患など、実習部会にとって緊張する事柄も多くありましたが、半年間の実習を無事に終了することができました。3年次領域別実習をふりかえり、その成果と今後に向けての課題を簡単に述べたいと思います。

1. 実習を通して学生達に見られた成果について

どの施設でも臨床講師の方々を中心となり、臨地実習について気配りをして下さったため、学生は非常によい環境で実習に臨むことができ、3年次の領域別実習の目的を達成することができたと考えられます。受け持ち患者決定には学生自ら、必ず同意をいただくことにしているため、患者へ接遇、説明やコミュニケーションのとり方など、かなり緊張したと思われそうですが、患者はもちろんのこと、臨床の方々の援助で学生は初めから医療人としての姿勢を学ぶことができたと考えられます。また、看護基礎教育で学ぶ看護技術について前もって提示していたため、必要に応じて声をかけていただき、学生は思ったよりも多くの経験ができたと考えられます。実習部会では、どの領域でも学生が積極的に実習に臨んでいる、という報告がされていました。

2. 臨床形態（臨床指導）について

初めての臨床講師制度の導入であったため、臨床講師と従来の指導者との相違に戸惑った施設もあったようです。しかし、臨床講師がリーダーシップを発揮し、臨床と大学の橋渡しとなって下さった施設が多かったように思っています。施設によっては、キャリアラダーの一環として臨床講師制度を活用して下さっているとところもあり、今後の臨床講師制度の充実と発展へと期待がもたれるところです。

3. 問題点と今後の課題

冬期間の実習に伴う悪天候や風邪への対策、災害や事故時の安否確認など多くの課題があげられました。新潟県中越大地震の発生後には各領域の教授を通し、連絡網により学生の安否を確認することができましたが、地震の影響で実習の継続が不可能になった領域もありました。これについては、別の施設の協力により実習場所を変更して継続することができました。しかし、受け入れる学生の人数などの問題が残されました。

また、実習へ行く途中の交通事故による怪我が1名、実習中に気分が悪くなり転倒して顔面に切り傷を作ってしまった学生も1名いました。実習に向かう途中、大雪のため実習施設に時間までに辿り着かず施設の方が迎えに出て下さり、帰りには駐車場の雪かきもして下さるなど、至れり尽くせりの対応をして下さったところもあったようです。事故時の対応や学生から大学への連絡方法の充実、連絡網など、実習部会で再確認をいたしました。

このように長期にわたる領域別の実習においては、開始前に万全と思っていても、予想だになかったことも多く発生し、実習時期や施設、事故や災害時の対応など完成年次に向け、さらに検討していく予定です。

最後になりましたが、素晴らしい実習環境を提供して下さった各実習施設の方々に心より感謝申し上げます。

教育活動

「専門ゼミ－専門実習－看護研究」始まる

4ヶ年の学業の総まとめとして

コーディネーター代表 柿川 房子

大学生として4年間の学業の総まとめである専門ゼミナール（2単位）が始まりました。

これは専門実習（2単位）、看護研究（2単位）と連動して学習するように計画されています。専門ゼミナールが始まると同時に、看護研究の講義が第1回、中島学長の「実践的看護研究の意義」に始まり、「文献を読む」堀助教授、「看護研究の調査方法」加城

教授、「論文を仕立てる」野地教授が、それぞれ基礎的な研究に関する講義を担当しました。また酒井講師、斉藤助手、飯田助手による各々の修士論文作成プロセス等の研究体験談は、その苦闘の様子に学生から思わず笑いや拍手が起こるほどに良い刺激になったようでした。7回にわたる講義は非常に効果的でした。

いずれも専門ゼミで、設定された10－看護専門領域において、学生は、自分で選択した各専門領域のテーマについて、文献等を通して批判的に読む力を養い、指導教官やグループメンバーとの討論を通して、適切に発表する力や看護研究に関する基礎的知識を発展させるようなかたちで学習を進めていくこととなります。

今後7月からは、4日月曜までに実習場所ならびに研究テーマを提出し、それぞれの課題に沿って、さらにその専門性を高めるために自ら目標をたて、計画を立案して、実習がスタートします。

最終段階として、指導教官の指導の下に看護計画書を作成し、論文、レポートとしてまとめ、発表し、討議、助言を得て、最終的に指導教官へ論文を提出します。

専門ゼミ終了、実習の段階でそれぞれの指導教官の専門領域にずれが生じる場合も出てきます。そのような状況が生じた場合にはそれぞれの指導教官と学生の間で柔軟に調整をすることができます。



専門ゼミのひとこま

論文提出は12月7日(水)17:00、論文発表会は1月17日(火)、18日(水)、最終論文提出は2006年1月26日(木)となっています。

新潟県立看護大学の第1期生の看護研究レポート・論文として、大きな期待を持っています。アカデミックな軌跡の第1歩となることには間違いありません。

コーディネーター (各領域教官9名)			
・基礎看護学	柿川 教授	・地域看護学	佐々木教授
・実践基礎看護学	堀助 教授	・老年看護学	田中 教授
・母性看護学助産学	加城 教授	・精神看護学	富川 教授
・小児看護学	加固 教授		
・成人看護学Ⅰ	酒井 講師		
・成人看護学Ⅱ	深澤 教授		

太字はコーディネーター代表、運営委員

センター長に就任して

看護研究交流センター長 吉山 直樹



「看護研究交流センター」という組織の存在を聞いて驚愕したのは、3年余り前に中島紀恵子学長から親しく新しい研究組織の話聞いた時です。このようなものがあれば素晴らしいな、と思いつつも、それを実現した中島学長の慧眼に頭がさがる思いでした。そして組織の出発の時から私は副センター長を仰せつかったのですが、離島の診療所長を離任したばかりで数年以上も研究活動らしいことが何もできずにいたので、自信は全くありませんでした。これまでまったく夢中で、ヨチヨチ歩きで前センター長の後をついて来ただけですので、今後もこの大任につき、皆様のお助けをお願い申し上げます。

さてセンターですが、平成17年度以降の新しい運営システムが検討された結果、4月より新しい組織上の変更がおこなわれました。次の諸点です。

- ① 所期の目的を達成したので、ネットワーク部会を発展的に解消し、ITに関する研究グループとしての活動に深化させることとしました。
- ② 平成16年度まではセンターは部会毎の会議で運営されていましたが、地域貢献と協同活動の強化のために中心組織として運営会議を常設しました。
- ③ 生涯学習・研修支援部会を中心に、地域の大学や諸施設との協同事業を強化していくこととしました。
- ④ IT環境の強化が地域連携の要である、という観点から新たな研究活動として取り組むこととしました(①と関連)。

昨年は中越地域が未曾有の大型地震(新潟県中越大地震)に襲われました。多くの本学の教員と学生が可能な限りの力を振り絞り、教務・学業の合間を縫ってボランティア活動に従事してまいりました。この経験から私共は貴重なものを得てきた、と思います。被災者の方を対象とした「待ったなし」のケアの実践は、決して価値の低いものではない、これこそ正に「実学」と思います。研究機関というのは、確かに不易の科学的真実に迫る実証的研究を目的とするものではありません。広い世界に飛び出し、そこでの希少な経験を積むことから学び、そしてその実践に芽生えた想念から多くの研究がスタートするのではないかと考えます。これこそが究極の地域貢献であり、あの天災は無言の内に我々の看護研究交流センターが進むべき方向の一つを教えてくれたのだろう、と思います。

今後とも「看護研究交流センター」を、よろしく願い申し上げます。

2004年度 看護研究交流センター中間報告会開催

2005年2月3日(木)、本学第1ホールにおいて、2004年度看護研究交流センター地域課題研究費「中間報告会」が開催されました。

中島センター長(当時)の挨拶に続き、分野1「地域のヘルスケア・ニーズに基づく支援に関する研究」(座長:田中キミ子教授)3演題、分野2「継続看護における連携システムの構築に関する研究」(座長:佐々木美佐子教授)2演題、分野3「看護職の臨床能力向上のための教育プログラム開発に関する研究」(座長:杉田収教授)2演題、分野4「豪雪地域における高齢者の居宅での保健医療福祉サービスの効果的提供」(座長:杉田収教授)2演題の計9つの課題について報告がありました。

最終報告に向けて、支持的、あるいは時に厳しい指摘が交換され、吉山副センター長(当時)の挨拶により閉会となりました。

2004年度後期 生涯学習支援事業実施報告

1) 専門講座「看護研究ステップアップコース 中間報告会」

日にち	2005年2月19日(土)
受講者数	研究発表者3名、当日受講者2名、その他9名
講師	小林優子(前本学助教授) 直成洋子(本学講師) 酒井禎子(本学講師)

本講座の受講者は、2003年度、2004年度本学看護研究交流センター主催の「看護研究の基礎」の受講経験者で、看護研究のテーマが明確であり研究計画立案がされている方を対象としました。今年度は初めての開講ですが3名が受講しました。昨年9月に「研究のまとめ方」および「統計処理のしかた」の講義を受講した後、2月までの半年間で月1回、アドバイザーの指導を受けながら、研究計画書の見直し、研究の実際、まとめ、中間報告(プレゼンテーション)と一連の研究過程を学ぶという計画のもとで本講座は進みました。今年度は、中越大地震の影響でアドバイザーとの面談の時期を調整せざるを得ないこともありましたが、ほぼ順調なペースで研修が進んだと考えられます。

中間報告会の参加者は14名でしたが、他施設からの看護師の出席もあり、ディスカッションが活発に行われ、有意義な講座となりました。研究発表者が今回の研究を完成させ学会あるいは研究会等でその成果を報告していただけること、また施設内で研究の指導者として御活躍いただけることを期待いたしております。

2) 専門講座「看護英会話冬期セミナー」

日 ち 2005年3月14日(月)、15日(火)
受講者数 5名
講 師 中村博生(本学助教)

本年度冬期セミナーは、参加人数の関係と受講者のレベルに合わせて、中級以上の教材を用意して実施しました。1日目は、病棟での会話を文法的な説明(関係代名詞と現在完了形)を加えながら、実際に応用できるように練習しました。2日目は、外国人講師による「Having a baby will change you!」と「Let's talk about ATARIMAE」と題する2つの話を聞き、講師との英語でのやりとりの中で、コミュニケーションスキルを学びました。また、2日目の午後は、少人数のメリットを生かして、外国人講師と多くの時間一対一で実践的な会話練習を行いました。

参加者の評価は、日程については概ね良好で、講座の内容の質・量ともに「ちょうど良い」が大半を占めました。少人数のため一対一での会話が十分にできたので、とても好評でした。また、外国人講師によるスピーチも、受講者個々に対応したインタラクションがあり、わかりやすいという評価を得ることができました。

3) 専門講座「看護情報処理冬期セミナー」

日 ち 第1回 2004年12月16日(木)・17日(金)
第2回 2005年1月20日(木)・21日(金)
受講者数 第1回12名、第2回12名
講 師 橋本明浩(本学助教)

今回の看護情報処理冬期セミナーは、看護職に必要な基本的なコンピュータリテラシーを身に付けるため、前半に「上手で高速な情報検索技術と正確な情報の取得、活用」や「構造的なワードプロセッシング技術」に関するインストラクションがなされました。また、後半では、やや専門的な「データベースと表計算ソフトウェア操作」と「プレゼンテーション技術」の演習がなされ、最後に「総合討論」が行われました。

本講座は、少人数のセミナーで、補佐員(サブティーチャー)を置き、一人一人にいきとどく講座を目指しています。受講者はほとんどが遠方から来られたにもかかわらず、早朝から熱心に質疑応答を行いながら2日間のセミナー期間を過ごしました。

受講者からは、今までほとんど使えなかったり、自己流で使用していたエクセルやパワーポイントの使い方を学び、表作成や表計算、プレゼンテーションの仕方などが簡単にできることがわかって、参考になったという意見が聞かれました。

(以上、本学ホームページより一部変更のうえ転載)

トピックス

1. 外部評価委員による「自己点検・評価」の実施

完成年度に向けて、昨年、大学の3年間の評価をするための報告書「本学の現状と課題 平成14年度～16年10月に至る本学の自己点検・評価」を、教員組織である自己点検・評価委員会が中心となって、作成しました。これをもとに、2005年2月22日(火)、野口美和子先生(自治医科大学看護学部 学部長)、前原澄子先生(三重県立看護大学 学長)、渡辺隆先生(上越教育大学 学長)を外部評価委員としてお招きし、「自己評価・点検外部評価委員会」が行われました。概要説明、質疑、視察の後、全教職員を対象に外部評価委員の先生方からご講評をいただき、大学組織、授業評価、図書館の整備等多岐にわたって評価を受けました。これにより、大学の将来的な改善点について多くの示唆を得ました。

2. 上越教育大学との地域貢献に関する連絡協議会を設置

かねてより本学と上越教育大学の間で検討されていた地域貢献を推進するための連絡協議会が正式に発足する運びとなり、2005年3月16日(水曜日)、午後2時30分より本学大会議室にて覚書締結式が行われ、渡辺隆上越教育大学学長と本学の中島学長によって覚書が交わされました。

連絡協議会は両大学の学長、教員を代表する者各2名、事務職員を代表する者各1名等で組織され、以下の構想の具体化に向けて検討を進めてまいります。

地域貢献に関する連携協議会につ



締結式(左は渡辺上越教育大学学長)

構 想

- ① 教育研究成果を広く地域社会へ還元することを通して、地域への大学の貢献に寄与する。
- ② 両大学のもつ知的・人的・物的資源を相互に支援することにより、両大学のパワーアップを図る。
- ③ 上越地域の市と連携して地域貢献を推進する。

3. 2004年度学長特別研究費「個人研究・共同研究中間報告会」を開催

標記報告会は、2005年1月13日(木)、本学第1ホールにて開催されました。中島学長の開会挨拶に続き、個人研究12題(うち2題は誌上報告)、共同研究3題の途中経過ならびに成果の一部が報告されました。

会場では研究方法や進捗状況に関して活発な意見交換が行われ、杉田研究交流委員長(当時)の挨拶を最後に閉会となりました。



学長特別研究費 中間報告会でのプレゼンテーション

4. 2005年度 科学研究費補助金の採択状況

1. 新規採択課題

申請者	研究課題(研究期間)	研究種目
井上みゆき	新生児看護の倫理: 重症障害新生児の最善の利益を守るケアの構築(2005~2007年度)	基盤研究
菅原 峰子	高齢脳卒中患者のせん妄に対する看護師の臨床予測に関する研究(2005~2006年度)	若手研究

2. 2005年度着任教員の継続課題

藤田 尚	韓国勸島出土人骨に関する形質人類学的研究(2004~2006年度)	基盤研究
高柳 智子	高齢者の医療用粘着テープによるスキントラブル予防に関する研究(2004~2006年度)	若手研究

5. 2004年度 海外研修報告会を開催

昨年度、海外研修に行かれた教員の報告会が2回にわたって開催されました。第1回は、2004年11月12日に開催され、イギリスに行かれた小林恵子講師（研修課題：地域母子保健サービスおよび子ども虐待へのケアサービスに関する研修）と和田佳子講師（研修課題：分娩事情および妊産褥婦ケアに関する研修）から報告をいただきました。

また、2005年2月21日の第2回は酒井禎子講師が報告者をつとめ、オーストラリアにおいて開催された「第13回国際がん看護学会学術集会」への参加に関して報告されました。ご自身の「日本のがん看護における代替・補完療法の使用とその効果」と題した発表内容以外にも、今回、国際学会への初エントリーだったことにまつわる失敗談などもご披露いただき、昼の1時間を有意義に過ごしました。



酒井講師による海外研修報告

6. 2004年度の教員相互による授業参観実績

F/D委員会により、初めての試みである教員相互の授業参観が行われ、表のように実施されました。これは、教員が互いの授業に参加しあうことを通して、相互理解を深めるとともに、教育力の向上に資することをねらったものです。

企画した前F/D委員長の関谷教授によれば、参観者からは“授業を見学することにより、他教員の担当科目の教育内容が分かった。いろいろな教育方法があることが参考になった。各科目の教育内容をお互いに知り合うことにより、内容の重複を避けたり、積み重ねの効果を期待したりできるのではないかと思った。大学の4年間の教育全体を見通しながら、どのような内容について、どのような効果を期待しながら、どの時点でとりあげ、どのようにして進めていくのか、という観点で見直す必要があると思われた”など、一方の見学される側の立場からは、“学生以外の授業参加者がいることに対する適度な緊張と刺激があったことも良かった”などの意見交換があったことが報告されました。

今年度は「公開授業」と名称を変更し、引き続き実施されています。

2004年度 学内教員による授業参観実施状況

回	月日	科目	学年	担当教員	参観者	意見交換
1	6月16日	形態機能学Ⅱ	1年	関谷教授	6名	5名
2	7月1日	臨床病理学Ⅱ	2年	吉山教授	6名	5名
3	7月8日	化学	1年	杉田教授	8名	4名
4	11月26日	基礎ゼミナール6	1年	山本講師	2名	3名
5	12月1日	小児看護学Ⅱ	2年	井上講師	3名	3名
6	12月13日	臨床病理学Ⅰ	1年	吉山教授	3名	2名
7	2月23日	国際看護活動論	1年	野地教授	3名	2名

7. ふれあい実習報告会

第3期生（現2年生）が昨年度実施した「ふれあい実習」の報告会が、2005年3月3日、本学の第1ホールで開催されました。2004年度の当該実習が計画されていた前の週に中越大地震が発生した関係から、中越地区にホームステイを予定していたグループを中心に、大幅な計画の変更を余儀なくされました。そのため、実習時期の延期のほか、一部を震災支援活動に変更する対応もとられました。

報告会当日は、実習グループごとに1畳程度の自作ポスターを掲示し、学生が、フロアのあちこちで、参加者の質問に対応している様子がみられました。実習を通して学生が体験した内容は非常に多岐にわたっていましたが、学生の表情からは、その多様さの中からも人々の生活を実感できたことの満足感が伝わってきました。



ふれあい実習報告会：
村松町グループ



ふれあい実習報告会：
災害支援グループ

8. 地域看護学実習について

4年次の地域看護学実習を受け入れていただく保健所、市町村、ならびに訪問看護ステーションの実習担当の方々においでいただき、2005年2月16日、本学にて地域看護学実習担当者会議が開催されました。

地域看護学実習を構成する地域診断実習、保健所・市町村実習、訪問看護実習は5月9日以降、展開され、4年生はそれぞれの機関でご指導をいただきながら実習に取り組んでいます。詳しい実施報告は次号、掲載の予定です。

連載 4

映画サークル

広報：木暮あすか・本田康裕

監督：佐藤泰宏

映画サークルでは「桜蓮祭」での上映を目標に、毎年1～2本の作品を制作しています。2003年春、2期生、佐藤泰宏の「映画を作りたい」という強い思いに賛同した仲間が一つになり映画サークルを設立しました。設立初期は絵コンテなしで、全て手探りの状態で進めていました。当時部員数13人でスタートした映画サークルは、本年度新たに1・2年生を迎え、現在の部員数は50人までになりました。監督を中心に脚本・絵コンテ・演出・撮影・編集など全ての工程を学生が手がけ、楽しい雰囲気の中で充実感を感じながら仲良く活動しています。

2003年は“生きること”をテーマにした「幸せな未来」、2004年は“友情”をテーマに「Mellow」という作品を制作しました。本年度の作品のテーマは「恋愛」です。現在、2005年11月の第3回桜蓮祭に向け、今までの経験や技術を生かし更なる

飛躍を目指して、試行錯誤しながら取り組んでいます。皆さんが楽しめるような作品ができるよう努力していますので、是非観に来て下さい。



サークル紹介

■試験科目等

	特別選抜入試		一般選抜入試	
	推薦 (高等学校推薦)	社会人 (自己推薦)	前期	後期
個別試験科目	小論文(英文資料の読解を含む)、面接		小論文、面接	
試験会場	新潟県立看護大学			
出願期間	17年11月1日～11月8日		18年1月30日～2月7日	
試験期日	17年11月26日		18年2月25日	18年3月13日
合格発表	17年12月5日		18年3月6日	18年3月20日

1. 平成18年度 入学試験の概要

■募集人員

入学定員	特別選抜入試		一般選抜入試	
	推薦	社会人	前期	後期
90名	30名	若干名	50名	10名

※一般選抜入試前期試験の募集人員には、社会人特別選抜の若干名を含む。

※一般選抜入試を出願する方は、平成18年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目(5教科6科目)を受験する必要があります。詳しくは教務学生課教務係(電話 025-526-2811)までお問い合わせください。

2. 平成18年度 3年次編入学試験の概要

募集人員	10名		
出願資格	次の各号のすべてに該当する者 ①看護系短期大学を卒業した者(平成18年3月卒業見込みの者を含む)、または、学校教育法第82条の10の規定に基づき看護系専門学校(専修学校専門課程)を卒業した者(平成18年3月卒業見込みの者を含む)。ただし、学校教育法第56条に規定する大学入学資格を有する(見込み)者に限る。 ②看護師免許取得者(平成18年取得見込みの者を含む)		
試験科目	看護学・英語・面接	試験会場	新潟県立看護大学
出願期間	平成17年8月1日～8月8日		
試験期日	平成17年9月7日	合格発表	平成17年9月16日

3. オープンキャンパス

新潟県立看護大学の概要や来年度の入試概要を、受験希望の方や、看護系へ進学を考えている皆さんに知っていただくため、オープンキャンパスを開催します。お問い合わせのうえ、ぜひご参加下さい。

- 期 日 第1回：平成17年 7月28日(木) 第2回：平成17年 8月 3日(水)
各回とも12時から受付を開始し、所要時間は13:00～17:00の予定です。
- 内 容 大学の概要、平成18年度入試日程のほか、施設案内、体験学習、個別相談を行います。
- 申込方法 参加希望の方は、事前に「氏名」、「学校名」、「参加希望日」を、電話、Fax、又はメールにて、下記までお知らせ下さい。(毎回120名程度の定員としますので、本学で参加日を調整させていただくことがあります)
- 問 合 せ 教務学生課学生係 電話 025-526-2811、FAX 025-526-2815、E-mail: kyoumu@niigata-cn.ac.jp

4. 平成17年度 1年次入学者状況

選抜区分	実施日	募集人数	受験者数	合格者数	合格倍率	入学者数	県内者数	男 性
一般推薦	H16.11.20	30名	45名	31名	1.39	31名	31名(100%)	2名(6%)
社会人特別選抜		若干名	9名	1名	9.00	1名	1名(100%)	0名(0%)
一般選抜(前期)	H17.2.25	50名	131名	50名	2.62	43名	18名(42%)	4名(9%)
一般選抜(後期)	H17.3.14	10名	90名	14名	6.43	12名	3名(25%)	3名(25%)
合 計		90名	273名	96名	2.84	87名	53名(61%)	9名(10%)

5. 平成17年度 3年次編入学者状況

試験種別	実施日	募集人数	受験者数	合格者数	合格倍率	入学者数	県内者数	男 性
3年次編入学	H 16.9.8	10名	25名	10名	2.50	8名	4名(50%)	0名(0%)

お知らせ

今年度もさまざまな公開講座(生涯学習・研修支援事業)を企画しております。一般公開講座としては、永井敏枝氏による特別講演「自らの歩みから得た看護観を通して看護技術の意味を問う」、シリーズ「海外の看護と日本の看護」、エルダリースクール「サクセスフル・エイジ

ングへの挑戦」、専門講座として「看護研究」「看護英会話セミナー」「看護情報処理セミナー」などです。

詳しくは本学ホームページ(<http://www.niigata-cn.ac.jp>)をごらんいただくか、本学教務学生課(電話 025-526-2811)までお問い合わせください。

編集後記

今号では、完成年度を迎えた本学が、「看護の質の向上を目指した良き看護者育成」という目標のもと、全学年が揃って本格的に活動している様子を取り上げました。

学生については、新入生・編入生の看護学への新鮮な気持ち、臨地実習中のいきいきとした表情、仲間との活発なサークル活動などが紹介されています。また教職員の動向、ならびに研究活動等に関連する記事として、新任紹介、講座紹介のほか、学長特別研究費の中間報告、海外研修報告、地域に根ざして充実しつつある看護研究交流センターの運営など、様々な活動・動向をご報告しました。さらに、入学試験や高校生を対象としたオープンキャンパス等の情報も掲載しております。

今後の本学が発展するために、ご意見や感想をお寄せ下さいますようお願いいたします。(広報委員 田中キミ子)



新潟県立看護大学

Niigata College of Nursing

本学ホームページ

<http://www.niigata-cn.ac.jp>

広報委員会

〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地

Tel 025-526-2811 Fax 025-526-2815

E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp

発行日：2005年7月19日



西暦配合率70%
白配合率70%の再生紙を
使用しています。